まちの宝物は、いつでも爽（さわ）やかな笑顔。

誰もが笑い合える長沼が好き。

自然と人が一緒に暮らしているまち、長沼。豊かな環境のもと、誰もが健康で楽しくすごすには、人の温かい心と、確かな医療、そして自らの健康づくりが大切。笑顔がかよう幸せなまち。それが長沼の未来です。

大好きな長沼で、ずっと暮らしていきたい——そんな願いに応えようと、町民の健康をいつも考えている人々がいる。

町で医院を開業している緑川先生は、昭和36年から外科・婦人科を中心に診療を始め、町民の健康・医療をずっと支えてきた。

町の医療は、当時からどのように変わっていったのだろうか。「当時の町の保健衛生事業は、予防接種や結核検診が主に行われていましたね。」それが昭和58年に老人健康法ができてから変わったという。町ではそれ以降、健康診断や健康教育が盛んに行われるようになり、先生は集会所や公民館で、健康の大切さを説いて回った。「長沼町は他の町村と比べてこういったことが盛んでしてね、〝出動回数〟もずいぶん多くなりました。」そんな苦労を笑顔で語るその表情には、町の人々の健康を思いやる優しさが満ちていた。

「地域のつながりが強い町ですから、ホームドクターの存在を大事にしていきたいですね」これからの町は、高齢化・少子化が進むだけに、町を支える成人の健康管理や寝たきり老人の在宅医療のあり方が、ますます問われる。「そういう方々の立場にたった医療を続けることが、自分の役目だと思っています。」

「人間には、自分で自分の病気を直す自然の力を持っているんです。私はそのお手伝いをするにすぎません。自治体と町民一人ひとり、

緑川規夫（のりお）先生

これからは、予防医学がますます大切になってきます。これからも健康診断や健康教育で、町の皆さんのお役に立っていきたいですね。

特集 【健康・福祉】